**3年間の実践報告**

**～本人理解、かかわるってつまりどういうこと！？～**

三方原病院　鈴木文望

**要旨**

今後の実践に活かしていくため3年間の実践を振り返り、本人とのかかわりや当時感じていたことを深める。

**１ はじめに**

精神科病院で精神保健福祉士として勤務して3年が経過しようとしている。精神科療養病棟を担当し様々な方とかかわってきた。経験年数ごとに当時感じていたことを振り返り、それを踏まえて今後の実践への取り組みについて発表する。

**２ 所属病棟紹介**

単科精神科病院の精神療養病棟に専従として所属。半数以上は長期入院者が占めているが、精神保健福祉士配置加算を算定している関係上、精神科急性期治療病棟からの転入者も多い。退院を目指す期限が設けられていることで、本人のペースを考えた支援との差に葛藤を感じている。

**３ 1年目**

振り返ると精神保健福祉士に対して漠然としたイメージを抱きながら就職したように思う。

約9ヵ月間の新人研修で、ひたすら毎日病棟で様々な方とかかわる日々であった。研修に取り組みながら、“かかわる”とは何なのか？という疑問を抱いていた。研修を通し、自分の存在を知ってもらい、本人が今いる環境、つまり病棟生活というものを知る機会になった。病棟で決められたルールの中で毎日過ごすと次第にその時間の流れに慣れていく自分がいた。色々な話をすることで、本人が今まで送ってきた人生も将来の希望も皆それぞれ異なる思いを抱いていると学んだ。

研修は病棟生活を送る本人の意思や権利について考える時間となった。

**４ 2年目**

病棟配属となり本格的に担当を持つように。振り返れば“本人理解”とは何なのかを模索した1年間だった。本人理解をするために、手探りでとにかく本人の元を訪れた。沢山話を聞かせて頂き、沢山話を聞いてもらった。その中で本人と思いがぶつかる時もあった。

日々実践を重ねる中で、本人とやってみたい事を思いつくが、支援の根拠を上手く言語化できずもやもやしていた。不安でいてもたってもいられず、当直中の先輩に押し掛けて、何度も相談に乗

ってもらった。それにより自分の軸がぶれている事に気づいた。

そこで研修に参加するなど振り返りを行うことで、自分の軸を作りながら再び本人理解に取り組んだ。

**５ 3年目**

担当して1年ほど経つと本人とのつながりに変化が見られた。関係性が築けていないと思っていた方に、転棟のため担当交代の挨拶に伺うと「寂しいね、一緒に○○やりたかったね」と予想外の言葉を頂いて驚いた事があった。

また、本人の希望に沿って退院支援を行っていたつもりが、退院後に「生きる楽しみがない」と気落ちした姿を見て愕然とした事もあった。自分と相手の感覚のズレを感じ、本人を理解したつもりでいた事に気づいた。主観だけで本人理解を行うのではなく、多面的に本人像を捉える必要性を学んだ。

3年目となり他職種・他機関と意見がぶつかる事も多くなったが、その分視野が広がったように思う。視野が広がることで本人理解の幅もまた広がっていったように感じる。

**６ 今後**

今回の発表内容を考え始める時期に、以前担当をし、自宅退院を叶えて本人らしく生活していた方の訃報が届いた。自宅での生活は約半年間。本人の幸せとは何だったのかを考えさせられたと同時に、人の人生の時間の重みを感じた。限られた時間の中で本人が自分と向き合えるような環境を考えていけたらと思う。

本人のことを知ろうとする姿勢を忘れず、これからの人生を一緒に山あり谷ありしながら考えられるようなソーシャルワーカーを目指していきたい。